「薬草を楽しむ」　No.070

アロエ、キダチアロエ、キダチロカイ

牧　　幸　男

アロエを含むヨーグルト

アロエの植物名はポピュラーである。今回植物について調べると、書物に掲載が少ないことに気がついた。私がよく使う『カラー図説日本大歳時記：北龍館』(昭和58年11月大刷発行)、『新訂牧野新日本植物図鑑』（平成12年3月初版：北龍館）に、植物のアロエは記載されず、『花歳時記大百科』(平成5年6月初版発行：北龍館）に初めて記載されていた。薬用植物として専門書にこれまで記載はあるが、いわゆる健康食品としの記載はほとんどなかった。最近になり、健康食品の利用が知られるようになると、様々な書物に紹介されるようになった。

キダチアロエは、一般に食用として栽培され、家庭で多く植えられているユリ科の常緑多年生の多肉植物。南アフリカ共和国からアラビア半島が源産で、現在300種以上が知られている。我国への渡来ははっきりしないが、貝原益軒(1630～1714)の『大和本草』（1707年）に記載があるので、遅くとも江戸時代には薬草として知られていたようだ。現在、我国では暖地では野生化し、キダチアロエは「木立ち」の名の通り茎が伸びて立ち上がって木質化し、成長につれ枝は多数に分かれ、高さは1m以上成長している。葉は灰緑色の多肉質で、葉の基部は広がって茎を抱く、夏に葉腋から花序を出して、真冬の約2か月の間ほど赤橙色の筒状花が咲く。葉の外皮は苦味が強いが、葉内部のゼリー質に苦味はない。

エジプトやギリシャなどで紀元前から薬用利用が知られ、旧約聖書ではアロエは没薬の名称で、シナモンと並べて香料として記載されている。セビリャのイシドールス（506？～635）ではロエはインドとアラビアで生育し、極めて甘く甘美な香りがする。祭壇上で供物としてジャコウソウの代わりに焚かれる述べ、更に時代が進み、ドイツの中世を代表する宮廷叙情詩人のヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ（1160？～1220？）が聖杯王アンフォルタス(詳細不明)の傷の痛みを和らげるためにリグヌム・アロエの香木をいぶしたりして用いた記述があるが、我々が普通に想像する「アロエ」とは無関係の香木のようだ。我国へは鎌倉時代頃に伝来している。

エジプトの医学書『エーベルス・パピルス』(BC1550頃）には下剤と収載されており、非常に古くから利用されていた。中国では、宋(960～1239)の『開宝本草』(974）に初めて蘆薈(ろえ)の生薬名で正條品*として収載された。しかし、唐代（618～907）の詩人劉禹錫(りゅうううしゃく)（772～824）の『傳信方』(818）に「私は少年の頃、曽(か)つて癬(せん)を患いい、初めは頸項の間にあったが、後に延蔓して左耳の上り、遂に湿瘡となって浸淫し・・・」とある。又、『本草拾遺』(739）では訥會(とつかい)とも称されていた。日本では「ろかい」と称しているが、漢音では「ロエ」と呼ぶのが正しい。

注＊：法律や規則などの「条項」を指す。

江戸時代に「蘆薈」と漢字書きにしたが、現在では属名の「アロエ」と一般に称している。

アロエは種類が多300種は生育していると言われている。身近な種類のみを列挙すると、

・薬用として、日本薬局方に**アロエ・フェロックス（ケープアロエ）** A. ferox、**アロエ・アフリカーナ**（A. africana)、 または**アロエ・スピカータ**（A. spicata）との雑種が収載されている。

・食用関係では、**キダチアロエ** A. arborescens、**アロエ・ベラ** A. vera、**アロエ・ディスコイングシー**A. descoingsii、**アロエ・プリカティリス** A. plicatilis が使われている。これらアロエは薬効となる成分は含有されないので、専ら食品に分類されており誤った使用をすべきではない。

短歌俳句に詠まれるようになるのは最近である。

朝まだき木立《きだ》ちアロエの蕊《しべ》高くあなたとはいつか会ってゐるはず　山下翔
鉢植えの　アロエの生の　ただ一葉　にがしともにがし　もぎ来て食ふに　菊地剣
干大根　細りきったり　アロエ咲き　清崎敏郎
硝子屋のアロエの鉢に冬の月　横山房子

植物名は、日本に伝来した際、中国語で「草むらに茂る」という意味の「蘆薈（ろかい）」が当て字され、その音読みが「ロカイ」となった。ロカイの語源はアラビア語で「苦い」を意味する alloeh に由来し、その音訳・意訳されたものが中国語の「蘆薈」になったと考えられている。江戸時代に「蘆薈」と漢字書きとしたが、現在では属名でもある「アロエ」が一般に名称となっている。

薬用は、日本薬局方に基原植物として収載されているアロエ（蘆會）は、同属のアロエ・フェロックス（青鰐蘆會、猛刺蘆會、ケープアロエともいう）及び、これとアロエ・アフリカーナ、 またはアロエ・スピカータ との雑種と定められている。薬効は、瀉下剤，健胃薬，常習便秘薬原料である。しかし、食品と医薬品の区別は、薬学の知識に乏しい人には難しい。日本薬局方に記載を示すと

・アロエ Aloe ALOE は「本品は主として Aloe ferox Miller 又はこれと Aloe africana Miller 又は Aloe spicata Baker との種間雑種(Liliaceae)の葉 から得た液汁を乾燥したものである。本品は特異なにおいがあり、味は極めて苦い。」
・アロエ末 Powdered Aloe ALOE PULVERATA は本品は「アロエ」を粉末としたものである。特異なにおい があり、味は極めて苦い。

と記載があるよう、植物の形態での使用は示されていないので、アロエの植物本体は医薬品ではないことが分かる。

学名の属名 Aloe は、古代アラビア語の苦みがある意、葉に苦い汁腋があるため。種小名は、ferox 強い棘のある、棘の多い、危険な、africana アフリカの、spicata 美しい、華やかな、arborescens 高木の、vera 美しい、descoingsii(Alo を冠し小さいアロエの意)

食用は、薬草として、そして観賞用として利用されてきた植物であるが、食材としても利用されている。なお、ほとんどのアロエには、薬効となる成分は含まれていないので、誤った使用をすべきではない。

花言葉は、「健康」「万能」「信頼」である。